「家族は他人より遠い」

りゅう　（40 代）

「なんで、お母さんには言えないの？」

私はそう聞いた。

目の前にいた中学２年生の選手は、しばらく黙ったあと、小さく笑って言った。

「家族だから。」

その答えが、ずっと頭から離れない。

友達には相談できる。先生にも話せる。コーチにも打ち明けられる。でも、一番近くにいるはずの家族には言えない。

反抗期だから。心配をかけたくないから。怒られると思うから。

理由はいろいろある。

でも、その答えを一つにすると、「家族だから」になる。

私はサッカーの指導者として、何百人もの子どもたちと関わってきた。

進路に悩む選手。怪我で苦しむ選手。試合に出られず、自信を失う選手。

その多くが、本音を私には話してくれる。

けれど、「親にはまだ言っていません」という言葉を、私は何度聞いただろう。

家族は、一番近い存在だと思っていた。でも、本当は違うのかもしれない。

一番近いからこそ、一番遠い。近すぎるからこそ、本音が見えない。

甘えられる相手だからこそ、素直になれない。そんな存在。

ある選手が、大きな怪我をした。

「もうサッカー辞めたい。」

そう口にしたのは、私の前だけだった。

数日後、お母さんから電話があった。

「家では『大丈夫』しか言わないんです。」

その言葉を聞いた瞬間、私は気づいた。

あの子は、お母さんに嘘をついたんじゃない。守っていたのだ。

心配をかけたくなかった。悲しませたくなかった。

だから、一番苦しい相手に、一番苦しいことを言えなかった。

家族とは、不思議な存在だ。

他人には見せられる涙を隠し、他人には言える弱音を飲み込み、他人には頼れるのに、家族には「大丈夫」と笑ってしまう。

だから私は、「家族は他人より遠い」と思っていた。

でも、それは違った。遠いのではない。

近すぎたのだ。

近すぎるから、照れくさい。

近すぎるから、傷つけたくない。

近すぎるから、言葉が足りなくなる。

家族とは、何でも話せる相手ではない。

何も話せなくても、そばにいてくれる相手だ。

グラウンドの照明が消える。

今日も一人の選手が、「またね」と私に手を振り、迎えに来た家族の車へ乗り込んでいく。

車のドアが閉まる。あの子はまた「大丈夫」と笑うのだろう。

いつか、その「大丈夫」の代わりに、本音を話せる日が来るのだろうか。

もしかすると、いや大抵の親は子どもの「大丈夫」が「大丈夫じゃない」ということに気がついているのかもしれない。

家族とは、言葉にならないものを受け止め続ける相手なのではないだろうか。

お互いに。